

高松先生との思い出

菊池治子

何かゼミに入りたいけど、特にこれがしたいというものがなかった私は、先輩方にどのゼミが人気でどんなゼミなのかをいろいろ聞きました。

その中でも、高松ゼミは、しっかり卒業論文に取り組み、楽しい時間を過ごせる人気のゼミだと聞き、すごく評判が良かったです。競争率の高い集団面接を受け、一番に発言してアピールすると受かりやすいとの情報があったので、高松ゼミに入りたい一心で頑張り、20人に選んでもらうことができました。後から先生に聞くと、順番なんて関係なかったらしいのですが、それでも選んでもらえたのでよかったです。

経済・経営・情報など大きすぎるテーマでは興味もわかず、なかなか理解することも難しかった私にとって、「モノから考える」「モノから学ぶ」という高松先生のテーマはすごくわかりやすく、興味とやる気を持てたことで、卒業論文を書くことも楽しみながらできたように思います。

自分の興味のある「モノ」を決め、大学内の図書館でそれについての統計を調べたり、直接自分の足を使って調べたりもしました。図書館内はいつも先生が案内してくれましたが、一般的な図書館と違いたくさんの資料が保管されている場所へ行く時は、なんだか秘密基地へ行くようでワクワクドキドキしたことを思い出します。

ゼミの時間は、それぞれの「モノ」に関して、これまで分かったことなどを報告していく中で、お互いの「モノ」に対しての質問やこういうことを調べたらどうかななどの活発な意見交換が行われ、いつもあっという間に時間が過ぎていきました。

違うクラスの人たちが集まるのに、すごくアットホームな雰囲気、ディスカッションをする時には白熱することもありましたが、先生の全くピリピリしない冷静な雰囲気に、いつも笑いがある中でも、内容の濃いゼミの時間を過ごしていました。

そして、ゼミの最後には必ず飲みに行く話になり、大学の外でも先生とゼミ生が語り合う熱い時間がたくさんありました。

授業のない時には先生の研究室にお邪魔して、卒論の話や就活の話、恋の話まで先生とは全く話が尽きず、居心地がよかったです。先生に仕事を手伝ってほしいと言われ、お手伝いをしたこともありました。

就活でも、私は何がしたいのか、どんな企業に行きたいかもわからず、あまり活動できずにいたとき、先生はただ頑張れと言うこともなく、タバコを片手にいつも笑顔で「なんとかなるで！」と優しく励ましてくれました。先生の「なんとかなるで！」は、私の心を落ち着かせてくれ、頑張る力になりました。その言葉に何度も助けられ、感謝しています。

大学を卒業してからも、先生のお宅に何度もお邪魔して、たくさん話したくさんの手料理のおもてなしもしていただきました。卒業して十年以上経っても、「いつでもおいでや!」と言ってくれる先生との関係が変わらないことが、すごく嬉しかったです。

忙しい中、私の結婚披露宴にも出席していただきました。主人や子供たちとお宅に伺った時にも、いつも快く迎えてもらいありがたかったです。みかん農家の主人には、みかんの生産量や消費量などの話から、「果物で唯一、輸入が増加しているものがあるけど何やと思う?」と急に出题するという、なんとも先生らしいと思いました。少し戸惑った表情の主人の隣で、私が「バナナ!」と答えると、先生が「正解!」と言ってくれました。先生とのこういうやり取りが私には当たり前でしたが、主人と一緒に先生と話した中で、このやり取りは忘れられません。子供たちとは、ポケモンGOで盛り上がっていました。携帯電話を拒んでいた先生がスマホでゲームをするなんて信じられませんでした。ポケモンGOと一緒に遊んでくれた先生に子供たちもあっという間に心を開いていました。先生は子供心もつかめるのだと正直驚きました。

高松先生が病気だと知ってからは、これまで以上にできるだけ会いに行きました。先生のボイストレーニングという名目で、先生のお宅に月一定例訪問してくれていた友人から電話がかかるときに、ドキドキすることもありましたが、先生の還暦のお祝いも一緒にすることができ、その次の年にも誕生日のお祝いをすることができました。私が用意した小さいホールケーキでしたが、それにろうそくを立て、みんなでハッピーバースデーの歌を歌った後、少し恥ずかしそうな笑顔でろうそくを吹き消す先生の姿が忘れられません。

ただ楽しそうなゼミに入りたいという気持ちから始まった高松ゼミでしたが、私の人生の中で、こんなにも濃いものになるとは思ってもいませんでした。

まだ高松先生がいなくなったような気がしません。

まだまだ先生と話したかったこと、やりたかったことがたくさんあります。

最後のホームカミングデーに行けなかったことは、心残りです。

でも、先生と過ごしたたくさんの時間は、ものすごく楽しかったです。

私は、高松先生に出会えて幸せでした。

高松先生、本当にありがとうございました。